行政主導 リサイクル

生ごみ 六ケ所・むつ、実証試験

県内のごみ排出量の多さが全国下位レベルにある中、六ケ所村とむつ市は今月から試験的に、家庭から出る生ごみのリサイクルに取り組む。県によると、行政が主導する形で生ごみのリサイクルを行うのは県内市町村では初という。生活系可燃ごみの半分が生ごみとされており、排出量減少への有効な手段として、県も注目している。

県環境政策課によると、2016年度の県民1人当たりの1日のごみ排出量は平均1004グラムで年々改善しているが、排出量の多さは全国6位と下位レベルにある。全体の底上げに向け、生ごみのリサイクル化に着目する県は、各市町村に行政主導の取り組みを呼び掛けたところ、むつ市と六ケ所村が応じたという。

六ケ所村は、村内に本社を構える日本原燃の協力を得て同社尾駮西社宅に、生ごみを堆肥化するための処理機を設置し、8日から運用を始めた。既にトウモロコシや昆布などの生ごみが処理されており、村福祉課の担当者は「出だしとしてはまずまず」と評価。堆肥は村内小中学校の花壇など地域で活用するという。

むつ市は、環境商品の販売、施工などに取り組む「アークネットワークサービス」（青森市）などと連携し、品ノ木地区にあるリサイクル事業者「ゆうあいむつ」の敷地内に処理機を設置。同地区の三つの町内会を中心に、市民から生ごみを集める（事前申し込み必要）。運用開始は22日。市環境政策課の担当者は「地域と共に循環型社会を実現したい」と意気込む。

県環境政策課の上村隆之総括主幹は「むつ市と六ケ所村の取り組みが成功し、他の市町村にも波及すれば」と期待した。

（安達一将）

鉄道、高速、航空 利用は前年並み

本県、夏・お盆期間

鉄道、高速道路、航空の4社は20日、夏期間やお盆期間の利用状況を発表した。本県関係は、いずれも前年並みだった。

JR北海道によると、夏期間（7月20日～8月19日）の北海道新幹線新青森―新函館北斗間の利用者は22万7600人で前年同期比2%減。お盆期間（9～19日）は10万3500人で、同1%減だった。

JR東日本盛岡支社によると、東北新幹線盛岡―八戸間の夏期間の利用者は前年と横ばいの77万3千人、お盆期間は同2%増の34万2千人だった。JR青森支店の担当者は「運休や目立った遅延などがなかったため、前年とほぼ横ばいで推移した」と分析している。

また、ネクスコ東日本東北支社によると、本県関係のお盆期間（8～19日）の利用状況は、東北自動車道青森ジャンクション―浪岡インターチェンジ（IC）間の交通量が1日当たり1万5千台で前年同期より3%増えた。八戸自動車道軽米IC―南郷IC間は1万1200台で、同1%減だった。

空の便は、フジドリームエアラインズのお盆期間（10～19日）の名古屋―青森間の搭乗者数が前年同期より1143人減の4282人だった。前年は同期間に臨時便として1往復増便し、1日4往復で運航したため。一方で搭乗率は前年同期より3・4ポイント増え、87・7%だった。

（山本光）